

ISSN 2189-9290

The University of Aizu
Center for Cultural Research and Studies
Annual Review No.27, 2020

会津大学文化研究センター
研 究 年 報

第 2 7 号
2020



会津大学

2021年3月発行

目次

	Page
巻頭言	
・“新しい風”に乗って ―2020年度活動報告―	苅間澤 勇人 1
論文	
・体育実技におけるオンライン講義と対面講義の学習効果比較	沖 和砂・中澤 謙 5
・2020年度会津大学新入生の生活と意識1 ―基礎集計―	蛭名 正司・沖 和砂・中澤 謙 11
・2020年度会津大学生の生活と意識1 ―基礎集計―	沖 和砂・蛭名 正司・中澤 謙 35
・体育実技科目における授業の再設計過程 ～新型コロナウイルス感染症への対応～	中澤 謙・沖 和砂 93
・湿度に関する問題解決の促進・抑制要因の検討 ―中学校の理科授業を対象として―	蛭名 正司・小野 耕一 101
・コロナ禍における学生支援に関するエスノグラフィ ―会津大学教職員による学生への食料品支援を例に―	池本 淳一 115
研究・教育・活動報告	
・網谷 祐一	141
・池本 淳一	142
・蛭名 正司	143
・沖 和砂	144
・苅間澤 勇人	145
・小暮 克夫	146
・清野 正哉	147
・中澤 謙	148

【巻頭言】“新しい風”に乗って

—2020 年度活動報告—

文化研究センター長 荻間澤勇人

ここ数年、文化研究センターの変化が続いています。2020 年度も大きな変化がありました。長谷川弘一先生が定年退職され、その後任に沖和砂先生が着任されました。持ち前の明るさで本センターに“爽やかな新風”を運んでくれました。その風に乗って本センターの変化が加速しました。その変化を、研究活動、教育活動、学内貢献に分けて示します。

まずは、研究活動です。宮崎敏明先生が学長になられ、研究クラスターを設けること、基礎研究費を変更することを打ち出し、大学の研究能力を高める方針を明確にされました。それを受けて、本センターでは教官が共同で行う研究計画を立てて、「福島県学術研究助成金」に応募しました。一方で、教官毎には、網谷先生が博士論文に係わる論文をまとめて「種を語ること、定義すること 種問題の科学哲学」（勁草書房）を出版されました。おめでとうございます。また、沖先生が科研費に応募されました。採択を願っています。

つぎに、教育活動です。本センター全教官の協力の下、「アカデミック・スキル1」を Zoom によるオンライン授業で実施しました。新入生のオンライン環境が整っていないことに配慮して、講堂で授業を行い、それを Zoom で配信しました。また、授業に先立って、Zoom のインストール方法等の指導を行い、大学における今後の学びへの支援も行いました。

「アカデミック・スキル2」を第4期に開講しました。例年は第2期の開講でしたが、基礎知識が不足した状態では主張をまとめられないと考えて、第2期と第3期に教養科目を受講して、その学びを生かして論文作成に取り組むというねらいでした。現在、その成果について検討中ですが、「論文になっていない学生やグループがあった」という報告があり、「アカデミック・スキル1」を十分に学んでいなかったのではないかと考えられました。今後もコロナ禍が続くと思われまますので、オンライン授業でどのようにして「アカデミック・スキル1」の学びを深めていくのが課題です。

続けて、学内貢献です。2月頃から新型コロナウイルス感染が拡大し、3月には緊急事態宣言が発出され、全国民が自粛生活を余儀なくされました。保護者の収入減やアルバイトの縮小などによって生活の厳しい学生が増えました。大学に米やラーメン、缶詰、インスタント食品などの食料物資が届けられました。池本先生を中心に本センターの先生方が物資の配給に尽力されました。この取り組みは、教授会において写真入りで紹介されました。

最後に、2020 年度を振り返ると、上記のとおり、本センターに期待されることに十分に応えたと思いま

す。2021年度もコロナ禍が続き、その影響が大きいと予想されます。今後、「アカデミック・スキル1」のテキスト作成や、各教官が指導する卒業論文の学生数が大幅に増加するなど、本センターに期待されることが多くあると思いますが、全教官が協力し合い、“爽やかな新風”に乗ったままで変化に対応していきたいと思います。